

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジヨット (9)

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

第9章 批評という心地よい余技

バジヨットの書物への関心は、ハズリットのそれと同様、直接的でダイレクトなものであった。彼はそれらの中における人間性に関心があった。彼にとって偉大な書物とは、第一に偉大な精神の生き生きとした美しい記録であった。それはまた歴史でもあるが、限られた意味においてのみそうであった。その正確な系図、微妙に遠回りして関連している、その先祖である多くの昔の書物と思想は、彼の好奇心を駆きたてなければ、想像力に衝撃を与えもしなかった。彼は歴史的方法が充分に発達する以前に書き始め、同時代の幾人かの批評家達ほど知性の歴史に興味をもたなかった。文芸批評の中で彼は過去をコールリッジのように行動の中にそれ自体を徐々に表現してゆく思想の広大なネットワークとしてではなく、思想のというよりむしろ風俗習慣の連続性によって次第次第にお互いに溶け合っただけの一連の社会として想像していたように思われる。明らかに、思想史へのこのような無関心は、全く当然なものである。何故なら、すでに私が示したように、理性や論理ではなく、習慣、慣例、偏見および伝統に人は支配されているというのが、バジヨットのお気に入りの理論の一つであったからである。時たま生じる革命にとって思想は一つの火花のような役割を果たすかもしれないが、平凡さがじきにその効果を忘却し、その本来の非道さを重ねて主張するようになる。多くの退屈な偏見がかつては大胆な考えであったということを彼が充分に考慮に入れているとは思えない。さらに、このような彼の学識は文学よりもむしろ経済学や政治哲学の周辺に蓄積していった。厳

密な意味では、彼は深く学問を積んだというよりもむしろ幅広い読書家であった。彼は退屈な書物を嫌い、二、三の賢明な人間を理解するためには、非常に多くの愚かな人間について読まなければならないということを十分に認識することは決してなかった。彼はシェリーに関する評論の中で、「モア(Moore)の長い伝記のあとでは、その人物についてのわれわれの想像力がきわめて乏しい詩人のことを考えることは、いくらか慰めとなるものである¹⁾と嘆息している。

文学上の常識に関するバジヨットの無知ゆえに、彼はそれらを長々とうんざりするほど繰り返しているという非難を招いた。サー・モンステュアート・グラント・ダフ(Montstuart Grant Duff)は『メアリー・ワートリー・モンタグー夫人論』(“Lady Mary Wortley Montagu”)の中で文筆業が衰頽してしまったと彼が力説している点に不平を述べ、サー・レスリー・スティーヴンは次のように主張している——

ものごとがいかに彼に印象を与えるか、そして同様にそれらが他の全ての有能な作家にほぼ同じような印象を与えてきたかをわれわれに語っているために、彼は時として平凡な人間という感じを与える。彼はあたかも自分が最初に発見したかのよう、シェークスピアやミルトンについて語る。彼は正統的な文学上の権威にあまりに無関心である(もしそのようなことが可能であるとしたら)ために、時には未消化の判断を公表することが出来るのである²⁾。

これらの評言にはいくらかの公正さが含まれている。明らかに、バジヨットはバイロンに『永遠の忘却』という宣告を下し、フランスの悲劇を単なる『散文的修辭』、『薄められた雄弁術』であるとして無視するときのように未消化な判断を示してきた。恐らく、シェークスピアに関する彼の評論もまた単なる常識を少し多く含みすぎているのであろう。それでもなお、われわれは『体験型の性質』のような名言やそれに伴う啓発的説明に感謝すべきである。『ジョン・ミルトン論』(“John Milton”)は同様に文体や技巧に関する陳腐な意見によって価値を損われているが、バジヨットはこれらの問題を扱う際の自らの弱点を意識しているように思われ、常にそれらを軽んじている。ミルトン論についてのいっそう大きな部分は、性格描写に費やされているが、われわれは安易にそ

れから先の40ページがその偉大な詩人の精神と個性についての本質的で洞察力に富んだ見解を多く含んでいるとは思わないであろう。

浪漫主義運動に関してバジョットが述べていることと、彼が沈黙していることは、批評家としての彼の特性を顕わにする試金石であり、知性の歴史に対する彼の態度の興味深い解説となっている。きわめて重要な現象(浪漫主義運動: 訳註)に関して彼は驚くほど寡黙であろうと努め、事実、彼はその言葉自体をかなり疑いをもってみなしているように思われる。10人の浪漫派の作家達について詳細に書いているとき、彼はその言葉(浪漫主義・運動)を殆ど使用していない。そしてやむをえずそうせざるをえないときは、彼が『無分別に浪漫的と称される³⁾』と言明している『装飾的』(“ornate”)という表現を故意に代用している。しかしながら、彼があえてその言葉を使用した数少ない箇所では、その本質的な意味と内容の人並み以上に把握していることを示している。スコットの想像力は『浪漫的な色合い』を帯びていると彼は説明している。その想像力は中世を『われわれがそうであることを願ったであろうように』、すなわち、少年の空想力の理想であるところの『戦さの時代』として描いている。それはメアリー・スチュアート(Mary Stuart スコットランドの女王(1542~67)いとこのエリザベス女王暗殺計画に関連して斬首された: 訳註)をスコットがいつそう批判的な時代に認識していたところの断固として人間的でどちらかといえば、愚かな人間としてよりもむしろ美しい殉死者の女王と扱っている⁴⁾。換言すれば、浪漫的想像力は空想的で田園詩的なものを扱う。それはものごとをあるがままの姿以外の形で見、現実から夢へと逃避する。浪漫的な想像力への洞察の点でいっそう鋭さをみせているのは、ディズレーリについての次の一節である。

言葉の悪い意味で、これほど浪漫的な政治的想像力を示した政治家はいなかった。換言すれば、それは現実の生活における種々の掟に殆ど染まっていなくて、それらの掟に反抗し、その代わりに弱々しい理想を打ち立てがちな空想力である。彼の理想的方法は、その理想的英雄達同様、常に真実性のある真に迫ったものの代わりに、何か壮大であるか驚嘆させるようなものを悪戦苦闘して産み出す精神から作り出されたものであるように思われた⁴⁾。

『ワーズワース・テニソン・ブラウニング』は浪漫主義をそのようなものとして扱っているバジョットの評論のうちで唯一のものである。その評論は彼がその性質についての鋭い理解力と その重要性と当時の文学の一つの現象としてのそのような運動を少なからず認識していたことを明らかにしている。浪漫派の詩がもっている独特の魅力についての彼の解説、それに偶然付随するものについての彼の説明、テニソンにおける田園詩的特質とブラウニングにおけるエキセントリックな特徴についての彼の分析は見事なものである。それにもかかわらず、彼は基本的な事実をいくらか混同している。彼の挙げる古典派の詩人、すなわちワーズワース、シェリーと浪漫派の詩人、テニソン、ブラウニングの間には思想と感情の根本的様式において 顕著な類似性がみられるということを彼は看破しえなかった。彼の誤ちは単に形式論理の誤ちからだけでなく、この迷路における彼の最も確実な目じるし——すなわち、その運動自体の歴史を無視しようとする傾向から生じている。その主題に関する現代の学者の論じ方にはいまだ及ばないが、貴重なヒントと啓蒙的な暗示に満ちているパーク、ゲーテ、ハズリット、カーライルのような作家をバジョットが相当に研究した人間であったために、この怠慢はいつそう目立つものである。しかし、私が指摘したように、思想に対してかくも疑念を抱いた思想家が思想史に無関心であるということ、広範な實際的経験を積んだ人間が当時の社会状況の観点からその時代の芸術を説明すること、現代文学の線香花火的で感傷的、断片的な性質（部分的にはまさしくそのとおりである）の由来を現代のビジネスと産業型の生活の心身をすりへらすようなテンポ、十分な余暇の不足、無知な読者の増加、中流階級における教養的背景の欠如、女性の影響力の増大、簡素な趣味を強制する権威あるグループの不在に求めていることは全くもって当然のことである。

個々の浪漫主義者についてのバジョットの分析は、全体としてのその運動の論じ方よりもいつそう鮮やかで信頼に足るものである。ワーズワースについてだけ彼は誤謬を犯しており、実際、彼はワーズワースについて批判的な人間であるとは言い難かった。何故なら、詩人がその名声のまさに頂点に立っていたとき、バジョットはまだ若かったが、最大の勢力をもった伝染病（浪漫主義運

動：訳註)にさらされ、冷静ではあったものの、その病から完全に回復することはなかったからである。周知のように、ワーズワースもまた付箋をつけてレッテルをはるのが容易な作家ではない。彼のことを偉大な宗教的教師と考えたものもいれば、有害な教義の恐るべき宣伝者とみなしたものもいた。彼は深遠な哲学者、怠惰な夢想家、偉大な合理主義者、偉大な反啓蒙主義者、ハートリー (Hartley (1705~57) イギの医者・心理学者で連想心理学を提唱した：訳註) の弟子、ルソーの信奉者と呼ばれてきた。そして、言うまでもなく、その全ての言い分は部分的には正しい。真理は強調の問題である。しかしながら、臨終のときに彼がいかなる人間であろうとも、またそれ以前に彼がそれ以外の何者であろうとも、詩人として彼が抜きんでて浪漫的であるということ、特有の感受性の鋭さ、抑制されていない感情、一途な自負心、浪漫的なものについてのアルカディア的想像力を示していること、彼の態度が純粋に宗教的なものではなくて、田園詩的なものであるということ、人生とその様々な問題に直面する代わりに、彼はそれらから退却し、自然との孤独で瞑想的な交感の中で、彼が現実には決して見つけることのなかった精神の平安と幸福を追求しているということを今日否定する者は殆どいないであろうと私は思う。何故なら、彼の岩や丘崇拜は、コールリッジに対して二人の仲たがいの後でも謙虚で寛大であることを教えなかったし、キリスト教徒の忍耐力でもって娘のドラ (Dora) の死に耐えることを教えもしなかった。事実、彼のキリスト教徒的忍耐力は時として人間が耐える以上のものであって、彼は大変粗暴な態度で、片一方の頬を向けることが出来た。(ルカ伝6章29節より：訳註) 人間の生来の善性を主張し、自然を賛美しつつ、彼が影響力をもった年月の間美しく説いたルソー的教義は、彼自身の人生にも人生全般に対しても影響を与えなかった点によって推賞出来る。その教義がいかなる貢献をなしたにせよ、それは純粋な宗教のもつ恩恵を授けることは殆どなかった。

バジョットはワーズワースの批評 という不安定な海の中に飛び込む臆病なダイバーである。それ以上下には彼が決して下降していかない (底すなわち、ものごとの真実という楽に行ける距離内で) 深遠さという深みがある。その地点に到達

すると、彼は再び即座に表面に上ってくる。思慮深い観察は、かなり漠然として一般化された是認の表現に譲歩してしまう。クーパーは自然を単なる背景として使用していると述べたあと、彼は次のように続けている——「ワーズワースにとって……自然は一種の宗教である。自然を特殊な研究の対象として扱うのに反対するどころか、彼はそれに匹敵または比肩しうるものを他に考えつかないといってもよかった。大地は人間が住むために創られているという教義を支持しなかったために、あたかも人間は大地を見るように創造されていると彼が考えているかのようにむしろ思われるほどである」。ここで彼は大変的確なことを言おうとしているように思われるが、以下のように続けている——「自然の全体像は彼にとって誰もが知っている詩句によれば、内在する永久的な力の特殊な啓示——あまねく行き渡る芸術の息吹き——永遠なる神の微笑であった⁴⁾。それでバジレットは誰もが知っている詩句を引用している。さらに、『ハートリー・コールリッジ論』の中でワーズワースについて語るときに、彼は大変確かな口調で次のように始めている——

彼の人生の目的は英国国教会主義（Anglicanism）を説くことであったということを確認する試みが近年なされてきた。彼の全生涯は、その偉大な詩人が教会の仕切りさじきの信者、聖杯洗盤の崇拜者であったことを確認するという明らかな目的をもって、ある役人によって書かれた。しかし、このことは合理的論証が可能ではない。ワーズワースはコールリッジと同様に、異端者として人生をスタートさせ、明敏なポープが賢明に述べたように、『いったん異端者となれば、常に異端者である』。健全な人間は最初から健全である。慎重な人間は始めから慎重である。したがって、ワーズワースは出発点が間違っていたのである⁵⁾。

しかしながら、論議は同じ調子の漠然とした賞賛で終わっている。ワーズワースの宗教は額面どおりに受けとられている。事実、彼の詩は聖書のレベルにまで持ち上げられている。聖書が多数の人間に与えているのと同じ道徳的影響力を少数の人間に対して与えているのであるから。

実際、彼の作品は知的生活についての聖書のようなものである。何故なら、本物の聖書が大衆がそうであるように、実際の職業や家庭内の束縛事に関与している人間に及ぼしているのと同一の探究、探索的で洞察力に富んだ力を、彼の作品は瞑想

的で孤独な若者達に与えているからである⁵⁾。

それゆえ、最終的には繊細な感情、審美的黙想、夢のような感傷性、宗教的瞑想は全て殆ど同一のものであり、等しく有徳な生活と高揚した内面の落ち着きを生み出すものである。同様にワーズワースに関する無批判的な別の一節を引用することが出来る。特にある一節は詩人に有利なように、自然なものと人工的なものとのルソー風の対立を主張している⁶⁾。しかし、それから先の引用はすでに充分人口に膾炙していることをただ例証しているにすぎない。あるがままのワーズワースはどこにも賛美されておらず、また彼の実像とは異なるものに対しての批判もどこにもなされていないが、彼はいたるところで当時の賞賛と熱狂という概括的な言葉で描かれている。

その他の浪漫主義者達についてのバジョットの扱い方に対しては、異議を申し立てることは殆ど不可能である。もし彼に何か欠点があるとすれば、これらの評論の最良のものうちの二つ、すなわち、シェリーとハートリー・コールリッジ論において、彼が当時の感傷性にごくわずかだけ譲歩しているという点である。ハリエット・ウェストブルック (Harriet Westbrook) の悲劇 (ハリエットは居酒屋の娘で、シェリーの最初の妻となったが、後自殺した：訳註) について批評したときに、彼はシェリーについてこう述べている――

この異様な顛末は、様々な点で彼の性格を功みに説明している。それははっきり悪を企んでいるのではないにしても、衝動的な気質がいかに行動や犯罪にいうなればせき立てられるかを表している。その行動や犯罪とは、普通の人間性の中ではひどい墮落を示すが、衝動的な気質においては同程度の罪のようなものは示さないものである。腐敗した領域を逸脱した奇妙な熱情に駆り立てられているが、彼の性格は汚点をとどめない。不意にそれは悪を通過するが、その純粋性を保っている。このような性格は大そう奇矯であるので、その行動を記録したものは、その人生に対する中傷文のようにも読みうる⁶⁾。

ルソーならそのようなロマンティックな逆説を詳説したかもしれないが、ジョンソン博士はそれに怒号を浴びせたであろう。『ハートリー・コールリッジ論』において、雄弁さはその本領を發揮している。「行動の退屈な単調さを救うた

めに、生涯子供のままである人間、気まぐれな衝動に基づいて行動し、意志の力が決して発達することのない人間、労苦を味わうことも糸を紡ぐこともせずに（ルカによる福音書12章27節及びマタイによる福音書6章28節より）、常に『うるわしきエデンの園の純真さ』をもっている人間がいくらかないとしたら、この世は荒野となるであろう。そしてそのような人間の一人がハートリー・コールリッジである」とバジョットは言明している⁶⁾。だが、私は微細な欠点について語ることにしよう。それ以外の殆ど全ては秀逸なものだからである。ディッケンズの『非均整的な天分』、クラフの知的憂うつ、サッカーの敏感な性質、シェリーの『衝動的気質』と抽象的精神は外科医の冷静、超然とした態度で探究され、『話し好き』(raconteur)の熱気でもって論じられている。これらの論考はその印象の鮮明さと手法の生きのよさの点に限っていえば、現代のものか、もしくは現代に近い作品のようにみえる。分析の深さと判断の穩健さにおいて、それらは50年後に書かれた著名な作品として通用するかもしれない。

バジョットは文学史家の知識を除いた、ありとあらゆる知識といってもよいものを文学の研究に持ち込んだ。彼は法律家となるための教育を受けていた。経済学者としての専門的知識を身につけていた。銀行家、編集者、政治家としての実際の経験を獲得し、学問の研鑽を積むうちに、生物科学から英国国教会の神学に至るまでの広範囲にわたる多種多様な知識を蓄積していた。その結果として彼の評論にはもう一つの次元が与えられているように思われる。それらが描写している人物達はその文芸上の重要性という単一の観点からではなく、その多様な関心と業績という多面的な観点から登場している。われわれは批評家として、また編集者としての両方のジェフリーについて、また単に人気文士のコレクターとしてばかりでなく、成功をとげた法曹界の一員としてのクラブ・ロビンソンについて聞かされる。シェークスピアの戯曲には健全な政治学があり、スコットの小説にはすぐれた政治経済学が含まれていることをよりはっきりと認識するようになる。われわれはギボンの議会での経歴に関する一政治家の意見を与えられる。要するに、われわれは文学の抽象的概念ではなく、全体的な個性に対面しているのだという感じを抱く。われわれは『文学を現実と

実務とのかかわり』においてみているのである⁹⁾。

バジョットが過去を詳細に記述するときほど、彼の独自の教養が大いに役立っているときはない。さらにまた、彼の描写は単に人生の多彩な局面を知悉しているという魅力をもっているのではない。歴史家の中には百科事典のような細目的事項の蓄積によって過去の時代を生き生きしたものにする才能もっているものがある。バジョットはその過去の時代をあたかも現代であるかのように語る才能をもっていた。本質的に、彼の描写はその他の幾人かの第一級の作家達のそれのように詳細でなく、いくつかの点でそれほど鮮明でもないが、彼の調子はいつそう自信に満ちあふれ、いつそう親しみやすい。彼は個人的体験を描写しているという幻想を創り出し、その幻想は事実と修辭の世界に値する。彼の独特の力量の源は何であろうか。彼自ら、「専門的研究は臆病な精神に付随する」¹⁰⁾と述べた。バジョットは広範囲で多方面にわたる教養という知的勇氣をもっていた。彼は多様な視点をとり、様々な環境に精通し、奇妙で変化に富んだ全ての社会現象の下に、あの不思議であって、なじみ深いもの——人間性を常に見出してゆく人間のもつ、持ち前の自信と気楽な適応力でもって執筆している。

彼の評論の中では、18世紀の文学、実業、政治は生き生きと詳細な数年前の出来事のようにみえる。彼はギボン家の真の創建者は次のようであると述べている——

歴史家（『ローマ帝国衰亡史』の著者、エドワード・ギボンのこと：訳註）の祖父であった。彼はいわゆる『南海のあわ事件』（1711年創立された south sea company が株の下落のため1720年破産し、多数の倒産者を出した事件：訳註）の時代に生存していた。彼の当時の習慣に順応した、第一級の実業家であった。すなわち、多くの種類の商品を扱う商人であって、恐らくデフォーの描くところの王国内（イギリス国内）における『全ての』商品の値段と品質を理解していた『完全なる商人』に近い存在であった。しかしながら、祖父エドワード・ギボンが優先させたのは、『体験を共有すること』であった。彼の天分は、ハドソン氏のそれのように、形而上学的なものや非存在的なものとの交わりへと向かう生来の傾向をもっていた。さらに彼はその運命が委ねられた時代の中で幸運な人間であった。時代はそのような趣味を満足させる多くの機会を提供した。恐慌や熱狂に関して多くのことが書か

れてきた。しかし、一つのことだけは確かである。すなわち、ある特殊な時代には大多数の愚かな人間は多額のくだらない金をもっているものであるということである⁷⁾。

さらに、そのような具合に語りが続いている。これほどくつろいだ炉端の会話はありえないであろうし、これほど新鮮で直接的な青年時代の記憶もないであろう。くだけた伝記的評論と称されるものの中で、バジヨットのものに匹敵するものは、容易にみつからない。作品全体と純粋な文学的才能の点では、歴史家としては彼は言うまでもなく、カーライルやマコーレイと肩を並べることは出来ない。後者はその『歴史論』の中で大変高邁な理想を自らに課したが、驚嘆する程見事に彼はそれを自著である英国史の中で現実のものとした。彼は芸術と風俗習慣、産業と商業、『取引所やコーヒー・ハウスの群衆』、宮殿に限らず田舎家における生活をも描写してきた⁸⁾。彼マコーレイは表面的な事件の背後に存在する大きな動きを完璧に近い形で描写してきた。恐らく明確に彼に不足している点は、彼が卓越していることを願っていた人間的な洞察力であろう。彼の描く人物達はきわめて多彩であるが、どちらかといえば空疎である。彼らは目もあやな外面となるか、重々しい生体解剖になるかのどちらかになりがちである。彼は同時代人の犯罪を彼らの先祖の指導者達になすりつけ、過去も現在も含めた全てのトーリー党员の中に何か非人間的で暗愚なものを見抜いている。彼はジェームス2世の私生活をあたかも議会におけるその君主を弾劾しているかのように扱い、彼の非常に繊細なほどに共感と親近感にあふれた態度ですらも、どこか法廷の喧騒に似た様相を帯びてしまっている。しかしながら、彼が主として抜きん出ている点は、歴史のパレードを描写していることである。私の言わんとする意味は、彼が単にもう一人のフロアサル (Froissart, 14世紀のフランス年代記作者で、イギリス王、ついでフランス王の宮廷に仕え、当時の騎士道社会を観察、『フロアサルの年代記』を著わした: 訳註) であり、単なる儀式や大虐殺を描いているということではない。彼はまた君主の意匠の壮麗さや、公的な論戦のざわめきや白熱ぶり、議会の華やかさ、雄弁術、ドラマをも描写している。彼は比類ない鮮やかさでもって、その文体というたゆまぬ軍歌に合わせて、

公的事件のその表面的、二次的原因とともにこれらの鳥瞰図とマーチを活写している。しかし、バジョットはわれわれをそれら出来事の背後へ連れていってくれる。彼はわれわれを王座のある公的謁見室から王の私室へと案内する。バジョット流の気楽で自信に満ちたやり方で、彼は政策を決定する偉大な指導者達をわれわれに紹介し、彼らの些細な欠点や秘かな希望を教えてくる。彼は事件の外面に現われたドラマや騒音のみならず、それらの内部に潜んでいる人間くさい意味にも焦点を当てている。マコーレイによる入念な描写と比べて、バジョット自身の簡潔な論評は多くの読者にとってかなり軽く思われるかもしれないが、真理の形式精神の両面に関して深い洞察を加え、大胆で迫真性があり、同時に著しく細心でもある。

このような簡潔な作品のうちで最も生き生きときらめいているものの一つは、エドワード・ギボンについてのそれである。その名高い『自叙伝』(Autobiography)における偉大な歴史家とは違って、バジョットは身を低くして一人の人間を描いた。彼はその修辞から人間を掘り出し、ローマ帝国の廃墟の下に快適な生活の喜劇を発見した⁹⁾。『メアリー・ワートリー・モンタギュー夫人論』の中で彼は非凡なる精緻さでもって、長いゴシップに満ちた書簡の中から同様に燦然たる喜劇と、完璧さの点ではごくわずかだけ劣る一つの寸評を引き出した。しかし、バジョットのギャラリーの中で恐らく最も異彩を放っているメンバーは、彼をうんざりさせた人間達であろう。退屈な人間がこれほど人を楽しませた例はなかった。愚劣さがこのように微妙に巧みに説明されたことはなかった。『サー・ロバート・ピール論』(“Sir Robert Peel”), 『サー・ジョージ・コーンウォル・ルイス論』(“Sir George Cornwall Lewis”), 『政治家ボリングブルック』(“Bolingbroke as a Statesman”)におけるオックスフォード伯爵ロバート・ハーリー(Robert Harley)に関する一節は、バジョットの著作の中の最も健全で楽しいページの一つである。

伝記作者はとりわけ真理にあふれていることを心がけるべきであり、実際、思想家としてのバジョットの顕著な特質で、ディナー後の執筆(余技的執筆)に特有な危険に対する彼の最大の防衛手段であったのは、紛れもなくアーノルド

が彼の『飾らぬ真実に対する関心』と呼んでいるものである。彼がそのような関心を抱いていることは、かなり注目すべきことである。何故なら、彼ほどに利口さを愛した人間はいなかったし、人は間違っているということに満足しさえすれば、殆ど無限に利口でいることが可能だからである。しかし、バジヨットはあまりに現実主義者で、無意味なたわ言を激しく嫌悪したために、真空の中の火花に満足出来なかった。彼は利口さを愛したが、真理と結婚していた。その結果として、人はただ単にバジヨットを読むためではなく、偉大な作家達について読むために、またそれら作家達の周りにどれほど独創的で美しい概念が紡ぎ出されるかではなく、どれほど理性的で公正な意見が彼らの上に展開されえるかを発見するためにバジヨットに向かうのである。別の批評家の中により異質で詩的な概念が見出されるかもしれないが、別の批評家の中にめったに発見出来ないものは、これほど深い思索に支えられ、これほど才気縦横に表現された非常に多くの健全な概念である。彼バジヨットは理性的批評の宝庫、『飾らぬ真実』の宝庫である。

ビショップ・バトラー (Bishop Butler) 論の中でバジヨットは哲学者を『模索者』(“gropers”)と『予言者』(“seer”)とに区分している¹⁰⁾。前者は真理という洞察力をもたない。彼らは言うなれば触覚器官の感覚のみの助けで真理に向けてゆく。そのような哲学者はアリストテレスやバトラーであった。予言者達はプラトンのように『絵画的』(“picturesque”)思想家達である。

…絵画的な性質をもった思想家はある洞察力、すなわち、対象をありのままに眺めるための心的イメージをもっている。その表面に生じる種種の確信と結論、疑惑と困難は、ただちに彼に強い印象を与える。彼は心眼でもって、全てのそのような確信が現実のものとなり、全てのそのような疑惑が提出される根拠となっている、ある顕著な例を見通している。ある偉大な典型的事実が彼の精神の前に詳細に描写されるべく存在しており、それは過度に難解であろうとする全ての仮説に対する一つの永続的解答である¹⁰⁾。

バジヨット自身の精神がそのようなものであった。彼は特殊なものの中に一般的なものを鮮明に見抜く力をもっていることにかけて抜きんでいた。限りなく

複雑な社会現象と人間にまつわる現象を扱わねばならない思想家にとって、これほど貴重な才能はないであろう。そのような作家は多数における個を明確に視座に入れておかなければならない、さもなければ、彼は幾たびも混乱に陥いるであろう。

したがって、バジョットの作品はいたるところで類型概念の啓発的影響を顕在化している。それらは多くの種類の国民性、党派性、類型性に関する印象的な描写に富んでいる。伝記研究の最も著しい特徴の一つは、バジョットが殆ど常に普遍的なもののある一面を通して個別的なものを見ているということである。彼の描くミルトン像の背後には『禁欲的善良さ』に基づく一般的類型が、バトラー像の背後には『道徳的思慮深さ』に基礎を置くそれがそびえて立っている。コールドウェル氏 (Caldwell) は典型的な議会の指導者であり、ブルーム卿は典型的扇動家で、ピットは典型的な行政府の政治家である。シェークスピアは『体験型の』、マコーレイは『非体験型の』気質をもっている。グラッドストーンには『雄弁な気質』と『弁護士の知性』が具っている。しかしながら、これらのうちで最も光輝いているのは、典型的英国人、典型的フランス人、典型的ホイッグ党员、典型的トーリー党员 (王党派) について彼の寸評である。

王党主義の本質は楽しむことである…古い習慣を維持する方法は、その状態を受容することである。『騎士党员 (Cavalier) の心の上をこの世は欲びの興奮を伴って通過してゆく。日々の出来事には心を高揚させるものがあり、『秩序整然とした』ことの中に熱情があり、古くからの祝宴に歓喜がある。サー・ウォルター・スコットはこのようなものの実例である。昔のスコットランドの習慣、習俗の全ては、彼の心の中で心から楽しむことと分かちがたく結びついていた。スコットランドの制度の一つにふれて、それらの習慣の一つを廃止するよう提案することは、個人的快適さ、すなわち彼の心が安らぐ点、思い出と希望に満ちているものにふれることである。この世がこの世である限り、楽天的生活は活気ある保守党主義に特有の源泉である¹⁰⁾。

しかし、バジョットによる概括的描写は、必ずしも好ましいものではない。彼は『絵画的』思想家に特有の欠点であるものを恐らくいくつも持っていたであろう。彼は明快さの与える興奮を切望し、具体性が与える確信を要求した。

私は彼が真理を犠牲にしたというつもりはないが、彼には時として真理を単純化する傾向があり、また例えば、政治経済学に関する彼の著作のあるものにおける場合のように、彼の論ずる主題のうちで、具体的であることが不可能で、明快であることも困難な、複雑な論理と入念な抽象的理性を必要とするような方面を軽視しがちである¹¹⁾。彼はさらに、『絵画的』思想家として自らの洞察力に少し安閑としすぎる傾向もみられ、多くの事実よりも少数の事実をはっきりと見ることの方が簡単であるために、余りに性急にそのスナップ写真をとってしまうことがあった。知識は彼を注意深くし、無知は彼を大胆にした。彼は多くのことを知っている政治と政府については健全で慎重な考えを抱いているが、かなり知識が乏しい文芸理論に関しては大胆で誤謬が多かった。その類型に関する詳細な理論を展開する際、彼は時折、急ぎすぎ、軽率であった。それらのうちで最良のものですら、多くの漠然とした資料とともに人間性についての長い観察のおかげで、真理を発見するための賢明な直観をもちえた人間の速断にすぎない。それらの多くは明らかに一気呵成に仕上げられたものであり、単一の実例、もしくは実例の断片に基づいている。したがって、二、三のものが皮相的であったり、見かけ倒しであるのは驚くにあたらない。アーサー・A・バウマン (Arthur A. Baumann) はバジヨットが描くところの歴史家の類型は、全ての実例を十分にカバーしているとはとても言い難いために、その類型から演繹されるマコーレイ人すら説明していないと指摘した。典型的歴史家は『冷淡で鈍感な人間』であると主張されているが、マコーレイは実際は「暖かい気質をもった思いやりのある人間であった。情愛の深い人であるばかりでなく、心から憎しむことの出来る人であった。共感する心と愛する心を並はずれてもった人の一人であった」¹²⁾。しかしながら、二、三の目立った不手際はあるものの、全体としてはバジヨットは明快、明晰であると同時に真実らしさにあふれていることに見事成功した。彼の描いた類型と一般化のいくつかは、心理学の分野で採用されていると私は聞いている¹³⁾。実際、これらのめざましい創造物とともに、バジヨット自らが一つの心理学を創設し、人間性について考えるときの手段となる新たな生き生きとした多くの用語をわれわれに提供してくれ

たのである。

バジョットの真理第一主義は全く異なった種類のいくつかの欠陥によって価値を損われていることを数人の批評家が感じている。ジョージ・サンプソン氏 (George Sampson) はこう述べている——「バジョットの作品を幾分台なしにしている無情さ。それは無情さであって決して鈍感さではないことを銘記してもらいたい。彼の気質は鋼鉄のようであった——すなわち、鋭く弾力性があるが、紛れもなく堅固である。彼は情緒というものを我慢出来ないほど毛嫌いし、その情緒の影響から生じた全ての行動に対して疑念を抱いているように思われた。彼は実際のところ、過度の合理主義の一実例であった」⁴⁴⁾。バジョットの『気質』の中にはそれほどないと思うが、彼の著作の中には確かに無情さと表現されうるようなある性質がみられる。文芸批評の殆ど至るところに概念への熱中ぶりと人物への無関心、病弊を探究することの熱心さと苦痛への素っ気なき、批評癖と畏敬または賞賛することへの消極性が感じられる。この傾向は『ヘンリー・クラブ・ロビンソン論』の中に最も顕著に現われていると私は思う。ここでは、批評家の心という明晰で冷やかな深淵を背すじが凍る思いで一瞥出来るように思われる。少なくとも文字の上ではその著名な日記作者に対して正当な扱いがなされている。彼の誠実さ、思いやりの深さ、寛大さは全て正当に強調されている。彼の文学に関する意見は非難され、彼の法律上の能力は賞賛されている。彼の欠点は寛大に解説されている。しかしながら、その如才なきと公正さ、そのユーモアと手際良さにもかかわらず、その評論はある意味で少し人を不快にさせるところがある。バジョットが愛する旧友の損失を哀惜しているというよりむしろ、珍奇な、人を楽しませてくれる動物の死を嘆き悲しんでいるという感じをどこか与えている。彼は『親愛なるクラブ』を思いやり深いからではなく、グロテスクであるために熱愛したのであった。恐らく彼はその現実の面白おかしい表現とは裏はらに、その日記作者の果てしない独白に無意識のうちに憤慨していたのであろう。いずれにしても、その評論は30年間にわたる友情の回想であるが、『無情であること』は否定しがたい。サンプソン氏はバジョットのもう一人の旧友であるクラブについての評論をよりいっそう

無情なものであると考えているようだが、恐らく彼の考えは正しいのであろう。

しかし、結局のところ批評の目的は恐らく同情を表わすことではなく、真理を発見すること、あるいは少なくとも公正な意見を展開することであろう。問題はバジョットがそうすることに成功しているであろうかということである。私の意見では、彼は比類ないほどそれを成し遂げている。ロビンソンとクラフについての描写は全く事実に合致し、ロビンソンの方は驚くほど完璧である。クラフの性格における善良で愛すべき部分を表現するのに、もっと心の暖かい芸術家であったら、明らかにいっそう多くのものを発見したかもしれない、このことを省略することは確かに真理の一部を無視することであるが、バジョットは評論を書いたのであって、網羅的な専攻論文を書いたのではないということは記憶されねばならない。クラフの精神と彼の悲劇の本質をこれ以上明確に描くことの出来るものは殆どいないであろう。事実、バジョットの無情さは彼の洞察力を著しく制限してはいない。冷静な超然とした姿勢は明快さと洞察力の正しさに当然付属するものである。ある不合理な陽気さは深い合理性を導く力をもっている。悲しい人間は幻想をもてあそばなければならぬ。真面目な人間は真面目すぎることに耐えられない。実際、バジョットを批判する者達は実は彼の主題よりはむしろ彼の態度に反対しているのである。彼が滑稽な描写ばかりでなく、同情的な描写を産み出すことが出来なかったのは遺憾であるが、彼が公正で正確な描写を成しえたことは、いっそう幸運なことである。クラフ・ロビンソンを重々しく描写することは、恐らく人間としてのバジョットにとってより親切なことであつたらうが、批評家としてのバジョットにとってより真実らしさにあふれていることにはならなかつたであろう。このような態度の限界は、感情の欠乏というより同情の不足から生じている。バジョットには感情は欠けていなかった。逆に、彼は心の暖かい友人であり、情愛深い息子で、情熱的な恋人であつた。実際、彼は情緒に『我慢出来なかつた』のではなくて、不合理な情緒に我慢出来なかつたのである。彼の心の中には情熱は強かつたが、意志と良心に従順であつた。情熱はしっかりと合法的な対象に縛りつけられており、禁じられたものや不可解なものによって燃え上ることはなかつ

た。何故であろうか。その答えは幼児期の教育の影響、道徳的想像力と訓練された精神のもたらす種々の傾向の中に発見されるにちがいない。いずれにしても、結果は明らかである。彼の自信に満ちに充足的な人生は、道徳的な弱さから来る深刻な苦悩や屈辱を決して知らなかったし、彼自身ははっきりと意識していたわけではないが、他人に同情するという傾向がなかった。彼は自らはダビデ王（イスラエル王国の建設者。旧約聖書によるとサウル王の武將として頭角を現わしたが、王のねたみをうけて亡命・放浪。王の死後、南方のユダと北方のイスラエルを統合して、全イスラエルの王となった：訳註）の属性と考えていた幅広い人間性にいくらか欠けていた¹⁵⁾。

恐らく、彼の態度の限界はまた想像力の欠陥と表現力自体のせいであったのだろう。彼の天分は批評や分析に関するもので、決して詩や叙情に関するものではなかった。彼の精神は感情よりも思想をいっそう鮮やかに表現したので、後者は前者をその著作から放逐してしまった。恐らく、彼の最も暖かで最も熱のこもった評論はシェークスピア論であろうし、それはまた彼の最悪の評論でもあろう。文学上の弱点をこれ以上さらして物笑いにならなかったこと、批評家であるから彼が詩的な気質ではなく、批評家の気質の長所を発揮したことは同慶のいたりである。

第 9 章 原 文 註

- 1) "Shelley," ii. 215.
- 2) "Bagehot, *Studies of a Biographer*, iii. 154.
- 3) "Wordsworth, Tennyson, and Browning," iv. 268; "Béranger," iii. 12; "Wordsworth, Tennyson, and Browning," iv. 280.
- 4) "Waverley Novels," iii. 57, 58, 59; "Mr. Disraeli," ix. 3-4; "Cowper," ii. 38-9.
- 5) "Hartley Coleridge," i. 213, 215; "Edinburgh Reviewers," ii. 74-7; "Béranger," iii. 10-11.
- 6) "Shelley," ii. 247; i. 187; "Brougham," ii. 305.
- 7) "Gibbon," ii. 127-8. See also "Lady Mary Wortley Montagu," iv. 69-70.
- 8) Thomas Babington Macaulay, "History," *Critical, Historical, and Miscellaneous Essays*, i. 426.
- 9) See pp. 177-8, 193-4.
- 10) i. 281-2, 307; "Macaulay," ii. 100. See also ii. 100-5.
- 11) See p. 276.

- 12) Arthur A. Baumann, "Walter Bagehot," *The Fortnightly Review*, n. s. xcvi (September 1915), 572; Bagehot, "Macaulay," ii. 89-92.
- 13) R. H. Murray, *Studies in English Social and Political Thinkers of the Nineteenth Century*, p. 221.
- 14) George Sampson, ed., *Walter Bagehot's Literary Essays*, pp. xii-xiii.
- 15) "Milton," iii. 183.